

雪のサンタマリア

キリシタン文学としての

『天地始まりの事』の比較文学的展望

ST. MARY OF THE SNOW

A Comparative Literature View

of *Tenji (no) Hajimari no Koto* as Christian Literature

小 島 環 禮*

The manuscript of *Tenji (no) Hajimari no Koto* which has been handed down among the Christians of Nagasaki prefecture's Sotome region is most deserving of the appellation Christian literature. It is a work of great interest but generally has not been counted among the works of Christian literature up to now.

I believe that the reasons for this are as follows. It is a story which seems to be based on *The Bible* but differs from it. Since the oldest manuscript is that of 1827 it seems inconceivable that it could be a work of the Christian century (mid-sixteenth to mid-seventeenth century). It is also even said of this book that it is definitely important evidence for ascertaining how Christianity changed in Japan during the period of persecution.

*KOJIMA Yoshiyuki 琉球大学教授。國學院大学大学院卒、主たる専攻に「説話文学の比較研究」がある。主な著書に「校注 風土記」（角川文庫）、「琉歌往来」（風信社）、「琉球学の視角」（柏書房）、「中世唱導文学の研究」（泰流社）、その他著編書論文多数。

It is certainly true that in *Tenji (no) Hajimari no Koto* there are many parts which were distorted during the age when Christianity was forced underground. There are indeed parts recast by new, local knowledge. However, it cannot be said that all parts which differ from *The Bible* are changes made during the age of persecution. In Europe as well there are many Bible stories which are not found in the orthodox transmission of *The Bible*. The materials of *Tenji (no) Hajimari no Koto* were derived directly from the knowledge of the missionaries and from the very beginning were not strictly faithful to the biblical account. Good evidence of this can be seen in the inclusion of the idea of "Adam's Apple" in its account of the creation. There can be no doubt that historically the original version of *Tenji (no) Hajimari no Koto* was born in the Christian period.

In *Tenji (no) Hajimari no Koto* there is a story of Mary performing the miracle of making it snow in mid-summer and having the name "St. Mary of the Snow" conferred upon her by the emperor of Heaven. This is very likely a reflection of the beliefs of the missionaries of that time. This miracle of Mary's is a legend of [the church of] Santa Maria Maggiore in Rome and "St. Mary of the Snow" is the name of the statue which is worshipped there.

I think it likely that this was emphasized among Japanese Christians because the missionaries were making concessions to Japanese popular beliefs. In Japan there were stories of spirits like the god of Mt. Haku, the god of Mt. Fuji, or Kannon responding to prayers and making it snow in mid-summer. This can be seen very early with respect to Mt. Haku in *Hasedera Kenki* (before 1219 ?)

and *Yôtenki* (1223?).

The god of Mt. Haku and the god of Mt. Fuji are both female, mother goddesses of exalted children, most appropriate deities for melding with “St. Mary of the Snow.”

From east to west all across the Eurasian continent, in Korea, China, and Estonia, are similar stories of summer snow. The tradition of Rome is but another example. There are similar stories in the churches of France and Germany. The compilation of legends by the brothers Grimm refers to a sixteenth-century document. The influence of Rome may well be evident but a legend from the Holy Land seems to be the basis for them.

Blending of the Christian story with local tales occurred everywhere. The localization of a story as seen in *Tenji (no) Hajimari no Koto* was due to there having been a local story similar to the scripturally-based one. Research on *Tenji (no) Hajimari no Koto* must make a fresh departure from a detailed investigation of authoritative sources.

キリシタン文学というと、16世紀中頃から約1世紀、いわゆるキリシタンの世紀に、キリスト教が日本に定着したことによって、どのような文学が生まれたかに興味をひかれる。しかし、キリシタン文学を、「キリシタン教徒により創作または邦訳された文学をいう」と定義すると、現存するキリシタン文学の作品は、きわめて限られてくる。「創作類はキリシタン版辞典・文典に引用された断句」程度で、「ほとんどすべては翻訳であり、しかも教典類が多」い。そこでキリシタン文学が、文学史上、独自の地位を主張しようとするれば、キリシタンの新しい思想の展開と、それを表現するための文体の確立を訴えることになる〔文献3〕。

しかし、そうした厳密な定義を見ながら、私がもう一つのキリシタン文学として見捨てることができないのが、『天地始まりの事』である。長崎県の外海地方の隠れキリシタンのあいだに写本として伝来し、尊重された聖典で、その内容は、『聖書』からはいちじるしく変化した聖書物語の一種であるが、天地創造、天使と人間の墮落、救世主キリストの生涯、聖マリアの事跡、世界の終末と公審判までを伝え、まったくキリシタンの世界以外ではありえない。現存する最古の写本の記年も、文政十年（1827）にさかのぼるにすぎないが、それをもって、『天地始まりの事』の原形の成立が江戸時代の末期であると断定することはできない。

『天地始まりの事』について、最初の記録を残したプチジャン神父は、1865年の手紙で、その特徴をみごとに述べている。「この本は、キリシタン用語で書かれており、……有益ではないかと思います。その本自体は、最初に考えたほど貴重だとは思いません。かなりの伝説がたくみに織りまぜてあるからです。と申しましても、この本の根底をなすものは、キリスト教的なものです」〔文献2〕。

ところがキリスト教史の専門家の評価は、おおむね、キリシタン弾圧という宗教にとっての異常な事態のなかで、いかに信仰が変化するかという、異端化の実例にする方向に傾いている。片岡弥吉氏は、「異常な環境条件が、いかに人間の思想や信仰まで異常化させるかということの事例として大切な意味を持つのではあるまいか」とし〔文献2〕、H・チークリス氏も、「もはやキリスト教と言えないほど変質したもの」とする〔文献4〕。

そうしたなかで、つとに隠れキリシタンの研究を手がけ、『天地始まりの事』の重要性を主唱してきた田北耕也氏の評価は、微妙に異っている。「死なずに隠れて生き続けたキリシタンは、この信仰と希望を、どのように保存し伝承していたか。それを土民的な言葉で語るのが『天地』である」という〔文献1〕。キリスト教からいかに離れているかという否定的な見方にたいして、キリシタン禁制のなかで、いかにキリスト教の信仰が維持されてきたかという肯定的な

視点である。

聖書と共通した世界を描く部分にも、いちじるしく聖書から離反した物語も多い。そこには、禁制の時代、正統な知識の欠如で生じた改変もあろう。地元の知識で、付加改訂したとおもわれる部分もある。しかし、全体の基調は、聖書の物語であり、キリシタンの知識である。これらのキリスト教的要素が、キリシタン禁制の時代の所産であろうはずはない。『天地始まりの事』の成立を具体的に論じることはまだできないが、その素材の物語が、多くは1600年前後のキリシタンの世紀にさかのぼることは疑いない。

『天地始まりの事』のなかにある、聖書の訛伝とおもわれるような物語が、すべて隠れキリシタン時代に生まれたと考えることも妥当ではない。聖書から一步踏み出した聖書物語の類は、キリスト教社会であるヨーロッパにもたくさんある〔文献16, 17〕。『天地始まりの事』のアダムとエヴァの物語にも語られている「アダムのリング」の趣向も、聖書にはないヨーロッパの聖書物語に由来する。『天地始まりの事』の素材には、聖書そのものよりは、キリシタン時代の宣教師の生の知識が入っている可能性が大きい。このアダムとエバの物語も、その好例であろう。

そこで注目されるのは、「雪のサンタ・マリア」の物語である。『天地始まりの事』には、次のように見えている。ろそんの国の帝王が、丸やを妃にしようと、家老をつかわす。丸やは承知しないので、家老は丸やを盗み出し、王にさし出す。帝王は喜ぶが、丸やは身をけがすことはできないと断る。帝王が財宝を見せると、丸やは、自分は術を見せようという。祈ると、天が御膳部を与える。帝王がほかの不思議を見たいというと、丸やは天に祈誓する。六月暑中に雪が降り、数尺も積もる。びるぜん（処女）・丸やは、天からの花車に乗って上天する。天帝から位を与えられ、「雪のさんた・丸や」と名づけられる。すぐに天からくだり、もとの宿所に帰る。帝王は丸やにこがれて死ぬ。

このあたりのマリアの物語の流れは、天の御使ガブリエルが、乙女マリアに、子たる神キリストの受胎を告げた聖書の事跡を誤り伝えたものといわれる〔文

献2〕。たしかに、マリアの懐妊に先立つ部分として、受胎告知（ルカ1：26－38）からの転訛とみることもできる。懐妊を結婚とずらして理解したための変化かもしれない。使者の家老は、聖書のガブリエルに相当することになる。そこで問題は、このような変化が、キリシタン時代には、起こり得なかったかどうかである。

私は、この程度の異伝は、聖書の知識が原典から離れ、聖職者以外の人の手に渡ったときには、つねに生じうべき可能性があると考えている。ろそんの国の帝王が丸やに結婚を申しこむ話も聖書にはないが、「ろそん」は、スペイン船がルソン島のマニラから日本に渡来したために、ルソンの名が印象づけられたといわれる〔文献2〕。すると、これもキリシタン時代の影響とみることができる。むしろ、こうした聖書物語は、禁制時代以前にできていたと考えてもよさそうである。

「雪のさんた・丸や」については、聖書以外に、キリスト教的な典拠が知られている。ローマのサンタ・マリア大聖堂の縁起である。しかも、それが、ほとんどそのままのかたちで、キリシタン時代の日本にも伝わっていた確証がある。1797年に太田全斎が編んだ『契^{きり}利^し斯^と督^き記』の1658年の記録で、キリシタンのジョセフ三右衛門の口述である。ローマの侍が、金銭を譲るべき子どももないので、サンタ・マリヤの寺を建てようと女房と相談する。その夜、夫婦の夢に、サンタ・マリヤが現われ、ローマの外に雪が降ったところがあるから、そこに寺を建てるようにという。夫婦で行ってみると、六月土用のうちであるのに、雪が降っている。そこに寺を建てた。それで「雪のサンタ・マリヤ」というとある。

ローマの伝えでは、この雪の降った日を、8月5日とする。この日は、近代の公教会祝日表に「聖マリアの雪の聖堂奉獻」とある祝日で、それはキリシタン時代にも広く知られていた。浦上・外海地方に伝わっていた1634年の『日^ひ繰^{くり}』には、7月12日の条に「ゆきのさんた丸や」とある。ヨーロッパ暦の8月5日である。京都の西の京で発見されたキリシタンの墓碑にも、「慶長八年六月二

十八日」「雪のさんたまりあの祝日」とある。これもヨーロッパ暦の1603年の8月5日である〔文献5〕。雪のサンタ・マリアの物語は、その祝日とともに、キリシタン信者のあいだに、よく知られていたにちがいない。

外海町の出津では、隠れキリシタンの家に伝わっていたバラの花冠をつけた無原罪のマリアの絵像を、「雪の聖母」と称していた。ヨーロッパにも、「雪のサンタ・マリア」と呼ばれるサンタ・マリアの絵像が数多く知られている。ローマのかのサンタ・マリア大聖堂のサンタ・マリアの絵像を原型とする像である〔文献7〕。しかし、ここの「雪のサンタ・マリア」は幼いキリストを抱く聖母像で、出津の「雪のサンタ・マリア」とは、はっきり区別がつく。出津では、「雪のサンタ・マリア」ではない絵像を、雪のサンタ・マリアと称していたことになる。

『天地始まりの事』では、マリアは、懐妊の段では「ころうどのさんた・丸や」（花冠のサンタ・マリア）と名付けられている。これは出津の「雪のサンタ・マリア」の絵像の呼称にふさわしい。それにもかかわらず、これを雪のサンタ・マリアと呼び慣わしていたことは、重要である。『天地始まりの事』で、処女マリアに、天帝が、雪のサンタ・マリアの称をさずけたのと同じく、キリシタン時代における、雪のサンタ・マリアの強調の名残りのようにみえる。

ローマの雪のサンタマリアの大聖堂は、キリスト教でいえば、大本山のような寺院で、「雪のサンタ・マリア」をまつことは、意義深いことであるという。キリシタン時代の宣教師じしんに、この大聖堂の雪のサンタ・マリアをもって、信仰の中心とするような観念があったのではないかとさえおもわれる。東京国立博物館の長崎のキリシタン遺物のなかにも、「雪のサンタ・マリア」と呼ばれてきたマリアの絵像があった。これはローマの大聖堂の雪のサンタ・マリアの写しで、日本人の作品ではないという〔文献15〕。サンタ・マリアに称号をつければ、すぐに「雪のサンタ・マリア」が思いうかぶような知識があったのであろう。

キリシタン時代、新年の行事に参加できないことに物足りなさを感じていた

信者のために、宣教師たちは、1599年、日本の暦の元旦をサンタ・マリアの祝日と定め、「御守りのサンタ・マリア」と称した〔文献6〕。ここでだいじなのは、キリスト教のほうで、信者の生活に歩み寄っていたことである。それは日本だけのことではない。ヨーロッパのキリスト教社会の成立が、すでにそうであった。キリストの降誕祭のクリスマスはヨーロッパの伝統的な冬至祭を吸収して成立し、復活祭のイースターもゲルマン民族の春の女神の祭に由来するという。

日本でも、キリシタン時代に、古来の日本の神や仏の信仰とキリスト教との習合現象が、いろいろ起こっていたとしてもおかしくはない。ヨーロッパに多くの聖書物語が生まれたように、日本でも、そうした習合を基盤に、すでにキリシタン時代に、聖なる物語の日本化が進んでいたことも十分に推測できる。『天地始まりの事』の日本的要素を、すべて、隠れキリシタン時代の所産とみることができない所以である。それはキリシタン時代を通じて、起こっていたことにちがいない。

そこで私は、このキリシタン時代の雪のサンタ・マリアの強調は、それが、宣教師の知識の重点であっただけではなく、当時の日本人の信仰に、なじみやすかったからではないかという仮説を抱いている。ちょうどキリシタン時代に、日本にも、夏の雪を縁起とする神の信仰があった。『江戸名所記』（1662年刊）に見える、江戸の本郷にあった富士権現もその一例である。山の上の大きな木のもとに、6月1日に大雪が降った。人が木の本に寄ると祟るので小社造った。時ならぬ大雪が降ったところなので富士権現をまつたという。

6月1日は、富士山の山開きである。東京周辺には、富士山の神をまつる浅間社や富士塚の由来として、この夏の雪の物語が分布している〔文献10〕。埼玉県行田市埼玉の浅間社、神奈川県厚木市中依知の富士塚、長野県南佐久郡田口村の富士浅間社などがある。富士の神は木花咲耶姫の命で、皇室の祖先になる御子の母神である。サンタ・マリアと同じく、聖母の夏の雪であるのがおもしろい。

さらに関東地方やその周辺には、観音信仰などに結びついた夏の雪の靈験談がある〔文献8, 10〕。埼玉県比企郡・入間郡では、比企郡高阪村の岩殿観音にまつわる伝えとして、坂上田村麿が大蛇退治をしたとき、6月1日に大雪が降ったといい、近郷でこの日に火をたく行事のある由来になっている。茨城県久慈郡真弓山の神社や、群馬県碓氷郡豊岡村の不動堂では、源義家が6月1日に臨時の年越しの祝いをする、元旦のしるしに大雪が降ったという。取り越し正月の例である。新潟県南蒲原郡百足村や、愛知県北設楽郡段峰村の田峰観音にも、6月に大雪が降ったという伝説がある。

十一面観音を本地とする加賀（石川県）の白山の神については、キリシタン時代をはるかにさかのぼる時代の記録に、夏の雪の物語が見えている。一つは滋賀県の山王権現（日吉大社）の縁起を記す、1223年の成立という『耀天記』である。白山には、富士山とともに、古くから雪の山の観念が定着していた〔文献9〕。広秀法師が私的にまつた白山の神の宝殿を壊棄するかどうか明日きめようといって、座主の慶命が翌日参ると、7月というのに、その宝殿の上に雪が1尺ばかり積っている。参集の人には見えないという。座主は不思議におもい、以後はその白山の神を一山で崇めることにしたとある。客人宮の縁起である。

奈良県の長谷寺にもある。1200年前後の成立という『長谷寺験記』にある。白山の頂上で、十一面観音の影向にあい、鏡を一面得た勝永房阿闍梨行仁は、神託により、寺に帰って、観音堂の西北の谷に白山の神の宮を造り、天禄7年8月3日の戌の半時ばかりに権現を移した。その夜半から夜明けにかけ、長谷寺の周囲24～5町のまわりに時ならぬ大雪が降り、1尺5寸も積ったとある。白山の神も女性で、観音である。それは天照太神の母御前の伊弉冉尊とも伝え、ここでも唯一のたいせつな神の母神が夏の雪を降らせたという点で、雪のサンタ・マリアの古伝と共通する。

夏の雪の奇蹟は、東アジアの大陸部にもある。朝鮮半島では、ソウルの由来談にもなっている。太祖が都を定めるとき、ある夜、天が大雪を降らせて、降

雪が籬を形成して城郭の境界を示した。雪籬の音ソウルイが、後にソウルになったという。これには、夏であるとは明示されていないが、平安北道碧潼郡雪城館では、夏に雪が降ったところに城を築いたという。また正方形に雪が降ったところに城を築いたという平安北道朔州郡の雪城館や、雪の上の雉の足跡により城を築いたという、咸鏡北道鏡城の雉城の伝説などがある。

中国大陸では、安徽省宿県大沢郷の雪花山にある雪姑墓の伝説になっている。反乱軍に食糧を与えていた雪花という娘が処刑される。埋葬も許されないが、6月の暑いさなかに、大雪が降って遺体を埋めたという。陝西省華山の西岳廟には、咸鏡北道の雉城と共通する伝えがある。廟の女神のために新しい廟を建てようとしたが図面がない。大雪が降り、白い兎が跳ねた跡が廟の図面になったという。雲南省蒼山には、愛知県の田峰観音と同じ伝えがある。観音が老婆の姿で現われ、雪を降らせて敵軍を防いだという〔以上、文献11〕。中国には、古くから観音を女性の神として信仰する例がある。

中国大陸、朝鮮半島、日本と、夏の雪の伝えは、一つの流れをもっていたにちがいない。中国大陸の3つの例が、個性のある物語になりながら、どれも女性が示す霊異であったのは興味深い。しかも、雪を降らせた神が観音であるとする伝えが、中国ばかりではなく、日本にも広くあったことは注目すべきことである。日本では、夏の雪が観音信仰とともに広まっていた時代があった。その日本で、夏の雪を介して観音とサンタ・マリアが出遇っていたのを見ると、マリア観音の成立にも、深い歴史があったことを考えてみたくなる。なぜ隠れキリシタンがマリア観音を崇拝したか。これもとうてい禁制時代だけの問題ではありえない。

ローマの雪のサンタ・マリアも、つまりは古い母神の信仰の物語が、キリスト教の世界に取り入れられたものであろう。ヨーロッパでは、ドイツを中心に、夏の雪の物語が、教会の伝説として多く知られている。そのなかには、ローマのサンタ・マリア大聖堂の伝説から直接学んだものも、少なくないであろう。しかし、そこにはなお、古くからの夏の雪の伝えが、雪のサンタ・マリ

アで統一された跡をとどめている例も、ありそうにおもわれる。キリスト教の物語と、その土地の聖地の伝説との習合である。

ドイツでは、古くはグリム兄弟の『ドイツ伝説集』第2巻（1818年）456番（3版：462番）に見えている。ルートヴィヒ帝が休むときに置いた、首に掛けていた聖母マリアの絵像が、石から離れなくなった。神に祈ると、やがて雪が降るから、雪の積った地面いっばいに、マリア聖堂を建てよという声が聞こえる。すぐに雪が降り始めた。帝はす早い雪（ヒルデシュネー）であるといつて、そこをヒルデシュネーと名づけた。帝は雪の積もった地面全体に教会堂を建て、聖母マリアに奉獻した。ヒルデシュネーが、後にヒルデスハイムに変わったという。グリム兄弟は、この典拠として、1588年と1732年の文献をあげている。

これは、ローマの雪のサンタ・マリアの一度の応用のように見えるが、雪が教会の平面を示すというのは、陝西省の西岳廟や朝鮮半島の城の例と共通している。城塞の位置を、神が夏の雪で示したという伝えは、ヨーロッパではエストニアにある。ユーラシア大陸の夏の雪は、建物の形を示すところに、一つの眼目があった。ドイツの北西部では、多くの教会に、この夏の雪の伝えがついているが、その日を6月24日の洗礼者ヨハネの祝日としている例もある。それは、キリスト教以前、ケルト族のドルイド僧の宗教で重んじられた四至分のうち、冬至祭と一對をなす夏至祭の日である。夏の雪にはふさわしい日であった。『天地始まりの事』に見える地方的な物語による同化も、教義と同類の物語が地元にもあったための習合現象であろう。

宣教師のなかにも、雪のサンタ・マリアの古伝と同じ信仰が、日本にもあることに気づいている人がいたのではないかと、私は想像している。雪のサンタ・マリアも、ヨーロッパの民衆の伝えのキリスト教化であった。それと日本の民衆の夏の雪の霊験とを習合することは、至極自然な成りゆきである。『天地始まりの事』のなかで、夏の雪が、マリアの靈力を示すかたちで用いられているのも、当時のヨーロッパの民衆の伝えに、ありそうな気がする。

雪の不思議を現わしたあと、マリアが昇天しているのも、キリスト教本来の

信仰から構成した物語のようにおもわれる。雪のサンタ・マリアの祝日は8月5日である。この日にマリアは雪を降らせた。そして8月15日は、マリア被昇天の祝日であった。雪を降らせたあとマリアが昇天しているのは、その祝日を踏まえた展開になる。本来の祝日の意義からはずれてはいるが、そこには、はっきりと、一つの物語の構成法の論理がみえている。フランシスコ・サヴィエル以来、日本教会は「被昇天の聖母」に奉獻されていた。昇天して天帝から位や呼称を得たというのも、信仰の強調でこそあれ、キリスト教からの遊離とはいえない。

『天地始まりの事』にどれだけ日本的部分があるかを明らかにするためには、田北耕也氏や片岡弥吉氏が本文の注釈のかたちで指摘してきた典拠を、徹底的に明らかにする努力をしなければならない。それも聖書や教義書の類だけではなく、幅広くヨーロッパなどのキリスト教関係の物語にまで目くばりをしなければならない。聖書と異なる部分は、隠れキリシタンの改変というのでは学問にならない。それでは、「アダムリンゴ」も日本での発明ということになりかねない。

そのためには、『天地始まりの事』の成立を、ひとまずキリシタン時代に置いてみる必要がある。すべてがキリシタンの知識という前提で典拠を求め、それがどのように維持され、あるいは変化したかを、文献学的に立証しなければならない。新しい変化にも、それなりの論理がある。その論理を明確に論証しなければ、なにがどのように変化したのかさえ、確認できない。キリシタン文学としての比較文学的展望こそ、『天地始まりの事』に命を与える唯一の方法である。

ドイツ語圏のVolkskundeでは、キリスト教的な世界の成り立ちを、教会などの宗教組織と民衆の信仰とのからみあいをとおして、精緻な方法で分析している。日本社会へのキリスト教の定着という文化現象を背景に負っている『天地始まりの事』の分析には、民俗学の方法が役に立つ。しかし、それは文献学的な研究を通り貫けたところで有効になる。民俗学は、本来文献学の方法をさ

らに深め、精確にするために発達した。文学の民俗学的研究は、文献学と同じ水準で行われなければならない。

主要参考文献

- ① 田北耕也〔校注・解説〕「天地始事」（『日本思想大系』第25巻『キリシタン書・排耶書』1970年・岩波書店）
- ② 片岡弥吉〔校注・解題〕「天地始之事」（『日本庶民生活史料集成』第18巻「民間宗教」1972年・三一書房）
- ③ 海老沢有道「キリシタン文学」（『国史大辞典』第4巻、1984年・吉川弘文館）
- ④ チークリス・H「キリシタン書とその思想」（文献1同書）
- ⑤ 新村出『南蛮更紗』1924年・改造社
- ⑥ 結城了悟『キリシタンのサンタ・マリア』1975年・日本二十六聖人記念館
- ⑦ Aurenhammer, Hans: Die Mariengnadenbilder Wiens und Niederösterreichs in der Barockzeit ; Der Wandel ihrer ikonographie und ihrer Verehrung. (Veröffentlichungen des Österreichischen Museums für Volkskunde. Bd. 8) 1956 Wien: O.M.V.
- ⑧ 山崎千束「六月朔日の雪」（『郷土研究』第3巻第5号、1915年・郷土研究社）＝『定本柳田国男集』第13巻、1963年・筑摩書房
- ⑨ 折口信夫「峯の雪」（『民俗学』第4巻第1号、1932年 民俗学会）＝『折口信夫全集』第15巻、1955年・中央公論社
- ⑩ 小島環禮「富士塚と六月一日の雪」（『民俗』第41号、1960年・相模民俗学会）
- ⑪ 斧原孝守「雪姑墓のこと」（『比較民俗学会報』第8巻第12号、1987年・比較民俗学会）
- ⑫ Brüder Grimm: Deutsche Sagen. Bd. 2, 1818, Berlin: Nicolai. = Deutsche Sagen (nach d. Text d. 3. Aufl. von 1891). 1981, München: Winkler (訳) 桜沢正勝・鍛冶哲郎『ドイツ伝説集』下巻、1990年・人文書院
- ⑬ Werde, Adam: "Maria, hl." (Handwörterbuch des deutschen Volksglaubens. Bd. 5. 1932/33 München: Walter de Gruyter)
- ⑭ Zimmermann, Walther: "Schnee" (Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, Bd. 7. 1935/36 München: Walter de Gruyter)
- ⑮ NHK〔テレビジョン放送〕『雪のサンタ・マリアー流転の南蛮絵師たちー』（歴史ドキュメント）1987年1月31日放送
- ⑯ Thompson, Stith: Motif-Index of Folk-Literature. vol. 1-6. 1955-1958 Bloomington, Indiana: Indian University Press.
- ⑰ 石井美樹子『聖母マリアの謎』1988〔第3刷〕1991・白水社

討議要旨

佐伯真一氏が、この話が求婚拒否をふくんでいることについて、質問された。発表者は「物語の構成が変わっていく中で出来たのだろう。受孕告知を結婚の申込と誤解してしまっは困るわけで、それでは物語の中心のキリストの誕生が出てこない。この程

度に理解している」と答えられた。ニールス・ゲルベルク氏からも、ドイツにはマリアが結婚する話はたくさんあると思う、と助言があった。